

特別支援教育実践研究会

第1回実践研究発表会実施報告¹⁾

開催日時：平成24年11月17日(土) 13:30~16:00

於：上越教育大学特別支援教育実践研究センター

特別支援教育に関する情報の共有と発信を図ることを目的として、特別支援教育実践研究会を設立し、会員が教育課程編成や学校現場・センター等における指導実践とその成果等を発表する場として、第1回実践研究発表会を開催した。13件のポスター形式による発表が行われ、本学院生・新潟県内外の小・中学校、特別支援学校教員等80名が参加した。

1. プログラム

1) 特別支援教育実践研究会及び実践研究発表会の趣旨説明

【研修室 13:30-13:50】

2) 研究発表【プレイルーム 14:00-16:00】

3) 閉会【16:00】

2. 発表要旨

1) 知的障害児を対象とした授業づくりに関する一考察

—内発的動機付けを大切にしたい支援—

発表者：檜垣栄慈（愛知県立千種聾学校）

近年、学習意欲を高める教育支援の必要性が指摘されてきた。本研究の目的は、内発的動機付けについて文献で学び、その評価手法を参考にしたいうえて、自分の授業を客観的に分析し、意欲的に取り組める授業づくりを考察するための配慮事項を検討することであった。分析対象は、知的障害養護学校小学部における教科学習の授業実践とした。内発的動機付けを高める要素である「交流感」「有能感」「自己決定感」を充足する手立ての観点から授業実践を分析した。その結果、「誰と誰がどのようにかわることによってどのような効果が生じるか」（交流感）、「児童が『できる自分』をいかに感じることができるか」（有能感）、「児童が選択決定をする機会をどのように設けることができるか」（自己決定感）の要素ごとに具体的な支援内容をまとめた。それらの効能を十分に発揮することができるように、複数の充足手立てをどのように連結させるか考察した。

2) 明治時代の雑誌「信濃教育」における特別教育の対象児童に関する研究論文の変遷

学力劣等・低能児童と疾患などの関係性を中心にして

発表者：中嶋 忍

本研究は、明治期の雑誌「信濃教育」における特別教育の対象児童に関する研究を解明する目的で、掲載された研究論文の概要について検討した。その結果、児童に関する論文は明治32年、医師による鼻と咽頭の疾患についての論文から開始され、続いて医師は、その疾患と学力劣等・低能児童との関係についても論じていた。そして教育対象であった「白痴」に近い児童についての論文は、いわゆる不良行為をする者と同様に考えられ、これに伴う教育を行うべきだと指摘している。また「悪

癖」と称する児童についての論文は教室内では一言も話さない「教場唾」と、いやなことなどがあるとすぐに泣く「よく泣く子」の指導について論じられていた。その後40年代になると学力劣等・低能児童に関する研究において、鼻疾患を患っていることが多いという調査結果が示されている。そして「吃音」に関する研究は、日本での矯正指導の遅れを指摘し、著者が矯正指導を開始したことについて論じていた。

3) 通常学級の授業参加に困難を示す発達障害のある生徒に対する支援

発表者：村井敬太郎（山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校）

中学校通常学級において、授業中の教員への妨害行動や授業への不参加といった問題行動を示していたADHDのある生徒1名に対して、市教育センター特別支援教育巡回指導員と中学校が連携して対象生徒の適切な授業参加や課題従事行動の増加を図る実践を行った。市教育センター特別支援教育巡回指導員が、「自己決定の機会と行動契約法の導入」「問題行動を起こさないための予防的対応」「問題行動が起きたときの対応」の簡易マニュアルを中心に構成した支援プログラムを作成して中学校に提案した。中学校では、この支援プログラムを基に対象生徒を支援するとともに、市教育センター特別支援教育巡回指導員と月1回のケース会議を行って支援プログラムを評価し改善点をまとめ、次の支援につなげていった。6ヶ月間の支援の結果、対象生徒の適切な授業参加や課題従事行動を増加させることができた。これらの結果より、授業参加に困難を示す発達障害のある生徒に対する支援方法について考察した。

4) 自作楽器「むち」の製作と活用

発表者：齋藤一雄（上越教育大学）

山澤小百合、柴田佐和子（上越教育大学大学院）

知的障害児を対象として合奏を行う場合、曲の構成の理解や楽器の操作に課題がある生徒は多い。そこで、繰り返しや特徴的なリズムのある楽曲のなかで、操作も簡単に活躍できる打楽器の製作を行い、幅広く活用方法を検討することにした。長さ90cm、幅6cmの板材2枚を打ち合わせる「むち（スラップ・スティック）」である。この板材2枚を蝶番で一方の端をつなげ、持ち手を取りつけたものである。製作にかかる費用も安く、時間もかからない。そして、ショスタコービチ作曲交響曲第7番第1楽章の中間部分を合奏曲に編曲し、用いた。さらに、「むち（スラップ・スティック）」でリズムに合わせて演奏する練習曲を自作した。

5) 糸魚川市におけるペアレント・トレーニングについて

発表者：宮島ひろみ（糸魚川市立糸魚川小学校）

糸魚川市では、平成19年度からペアレント・トレーニングを実施している。今年で6年目を迎えた。初年度は、市の療育相談をされていた県立吉田病院の新田初美医師がインストラクターを担当され、受講者8名でスタートした。それ以降は市内の発達障害通級指導教室の教員が担当している。これまでの6年間で48名の保護者が受講された。最近2~3年は受講希望者が増える傾向にある。受講された当時の対象となる子どもの学年・年齢では、小1児童が11名で一番多く、小4が7名、小5が6

名でこれに続いている。最近では、保育園の年中児（5才）から高等学校3年の生徒（17才）までと非常に幅が広がったので、子どもの年齢によってグループ分けをして実施している。これらに伴い担当者も増員し、チームを作ることも検討している。また今年度は、保育園や幼稚園の教職員および家庭相談員を対象とした講座も行われ、ペアレント・トレーニングの内容の理解も広がりを見せ始めている。

6) 上越地域難聴児サポートシステム5年間の取組

発表者：加藤哲則（上越教育大学）

前田智子（新潟県立長岡聾学校）

我妻敏博（上越教育大学）

我が国における新スクの開始から10年以上経過し、難聴の早期発見において多数の成果が報告されている。しかし難聴確定診断後の療育・教育に関しては、地域によって十分整備されていない状況がある。そこで、難聴児支援の地域モデルとして2007年に設立した『上越地域難聴児サポートシステム』の活動の現状について、同地域の新スクの実施状況ならびに小・中学校に在籍する難聴児の調査結果を含めて報告する。

7) 長岡聾学校「子どものきこえ相談室」の発足から上越地区における現在の活動について

発表者：前田智子、磯部則子（新潟県立長岡聾学校）

我妻敏博（上越教育大学）

長岡聾学校では、昭和28年から教育相談を実施してきた。その後、幼稚部が設置され、早期発見、早期教育の重要性から0歳からのきこえ相談、支援を行ってきている。10年ほど前から新潟県でも「新生児聴覚スクリーニング検査」が実施されるようになり、0歳で難聴が発見されるようになってきた。そこで、聾学校のセンター的役割がますます重要になってきている。そんな中で、上越地域での「きこえ相談」の必要性を耳鼻科医、行政、聾学校、上越教育大学が共通理解し、連携しながら「上越子どものきこえ相談室」を発足させた。さらに「上越地域難聴児サポートシステム」とも連携しながら、上越地域における難聴児の早期発見、相談を行っている。今回は、発足までの経緯と、現在の活動内容、課題について発表する。

8) 知的障害教育臨床実習の取り組みと成果

発表者：平澤真梨奈、塩野谷彩、二階堂彩子、

坂上俊介（上越教育大学大学院）

村中智彦（上越教育大学）

特別支援教育コースが開講している大学院生対象の授業科目として、特別支援教育実践研究センターで、「知的障害教育臨床実習」が実施されている。臨床実習の目標は、参加児の発達や学習を促すとともに、受講学生の指導者としての診断的評価（実態把握）や個別の指導計画の作成、指導、評価に関わる基礎的な指導技術や実質的指導力の習得を目標としている。本発表では、その取り組みや成果の一部を紹介する。

9) 特別支援教育支援員の活用と評価（1）

一支援員の役割と職務満足感を中心に

発表者：村中智彦（上越教育大学）

全国小中学校の特別支援教育支援員を対象とした実態調査の結果の一部を報告する。本報告では、支援員の属性や役割、職務満足感と関連要因について述べる。357名の支援員から回答があり、小学校の支援員が71.7%、中学校が27.7%であったこと、職名では特別支援教育支援員が最も多かったが、学校支援員や介助員などの50を超える職名が認められたこと、支援員は特定の児童生徒を担当するか、クラスや学年全体の児童生徒を担当する役割を担っていたことなどを報告する。

10) 長岡聾学校高田分校の教育活動の実際について

発表者：青木ひとみ、五十嵐佐智江、小池 豊

（新潟県立長岡聾学校高田分校）

我妻敏博（上越教育大学）

今年度、上越特別支援学校内に念願だった長岡聾学校の分校が開設された。2教室という手狭な教室環境であるため、幼稚部のみが開設となった。在籍幼児は5名（年少3名・年中1名・年長1名）。職員は教頭を含めて4名で分校の教育にあたっている。長岡聾学校という集団の中で教育を受ける機会を週2日、分校という少人数の中で個を大事にした教育を週2日、地域の保育園という健聴の集団で週1日教育を受けている。分校では、季節・行事などを教材にしてことばの学習をしている。今回は日頃の活動の様子を発表する。

11) 特別な教育的ニーズのある児童のための内発的動機づけに基づく学習支援活動

一放課後学習会における小集団学習場面の提供を通して

発表者：大庭重治、葉石光一（上越教育大学）

石川緑里、鈴木 康、行方桃子、芦口玲子、

石田脩介、井上和紀、越井絵美、樋熊一夫、

山下雄己（上越教育大学大学院）

通常の学級に在籍する児童の中に、学習に対する能動的な姿勢を身につけるための補完的支援を必要としている児童が存在する。このような児童に対しては、自ら学ぶことの楽しさを味わうことができるように、特別に配慮された学習場面を提供していくことが必要である。そのひとつの試みとして、平成17年度より、上越市内の小学校において、小集団学習場面への参加を希望する児童を対象にした内発的動機づけに基づく「放課後学習会」を定期的に開催してきた。本報告では、この学習会のこれまでの活動を振り返ることにより、地域の学校現場において実施した学習支援活動の意義を改めて確認するとともに、その継続・発展に向けた今後の課題について検討する。

12) 小学校に在籍する健康に特別な支援を必要とする子どもたちを対象とした発達支援教室の取り組みについて

発表者：八島 猛、大庭重治、笠原芳隆（上越教育大学）

小林優作、村井勇人、芝真奈美、小澤俊介、

村岡竜二、藤林優徳（上越教育大学大学院）

小学校には慢性的な疾患を抱えるなど、日頃から健康に特別な支援を必要とする子どもたちが少なからず在籍している。こうした子どもたちの発達支援の場として、平成23年度から、「ふれあい教室」を立ち上げた。この教室は、他児や支援者との交流をとおして、子どもたちの自己に対する気づきや適切

な自己評価の形成を目指している。本報告では、「ふれあい教室」開催までの経緯とこれまでに行われた取り組みについて紹介し、現状および今後の課題について検討する。

13) 青年本人活動からの学び

－卒業生への支援と在學生への指導を考える－

発表者：宮腰一樹（ナディアの会会長）

小池和子（妙高市立にしき特別支援学校）

石渡あかり，澁谷司，正木真弓，山本喜和子，

吉田梨恵，石川緑里，森本悠希，佐藤貴宣，

奥野まどか，川西沙希，嶋田恵美子，

村田民恵（上越教育大学大学院）

笠原芳隆，八島 猛（上越教育大学）

本発表では、障害児・者、主に肢体不自由や病弱等のある特別支援学校を卒業した青年（以下、本人たち）が自ら中心となって運営（計画・実施）する余暇・生涯学習本人活動（以下、本人活動）の創設経緯や活動の実際について報告する。併せて、活動に参加している本人たちの、本人活動に対する評価や今後の実施計画、自身の生活・就労に対する考え方等についても報告する。これらの資料を基に、特別支援学校卒業生からみた教育的ニーズを明らかにし、特別支援教育における卒業生への支援や、在學生の就労に限らない卒業後の生活全体を見すえた指導のあり方について、意見交換できればと考えている。

1) 本事業は上越教育大学研究プロジェクト（平成24年～平成25年）により実施した。